

チャンスをつ掴むのは「想い」の強さ

株式会社イデア クリエティブディレクター
代表取締役

しのづか まさのり
篠塚 正典



聞き手
むぎなて いさお
室舘 勲
(株式会社潮流社
代表取締役社長)

工作に命を懸けた幼少期

——篠塚先生は長野オリンピックのエンブレムデザインを手掛けられたことで有名です。現在に至るまでのお話をお伺いしたいと思います。どういった幼少期を過ごされましたか。

篠塚 私は1960年に東京都江東区砂町に生まれました。幼稚園の頃から絵を描くことが好きで、物心ついた時から常に絵を描いて



篠塚 正典 氏

いました。近所の駄菓子屋でプラモデルを買って組み立ることも好きでした。小学生の時、毎週ウルトラマンを見終えた後、その日出てきた怪獣を絵日記帳にクレヨンで思い出しながら描いている、そんな小学生でした。

——幼少期から、絵を描くことやモノづくりが大好きだったのですね。

篠塚 小学校の夏休みの宿題の工作が大好きで、夏休みに入る前からずっと、何を作ろうかと考えていました。子どもながらに、お金を入れると豆電球が光る貯金箱などを作ったりして、夏休みの工作に命を懸けていた少年時代です。

高学年になると、どんどん夢が大きくなって設計図を作るようになりました。小学校6年生の時は江戸城を作ろうと決めました。百科事典から一枚の江戸城の絵を見つけ出して、

それを見ながらバルサ材と紙粘土を加工して、拾ってきた石を使って石垣を作って。プラカラーで色を塗って、天守閣を復元しようと思いました。夏休みを全部費やしても終わらず、8月31日には家族総出で手伝ってもらってやっと仕上がりました(笑)。

9月1日に抱えて教室に持って行くと、みんながワーツと驚くのが楽しくて。そういった工作に命を懸けていた小学生時代ですね。

——幼少期から、モノを作ることへの情熱が溢れていた。

篠塚 絵を描くこと、物を作ることがとにかく好きでした。中学では、美術の時間に、ポスターカラーを使えばキレイにムラなく塗れることを学び、レタリングという文字をキレイに描ける技術を習いました。それでポスターを作ったら本当に印刷したみたいキレイ

なポスターができあがり、大変感動したことを覚えています。この感動が、後にグラフィックデザインになるきっかけだったと思います。その感動から中学時代はポスターばかり描いていました。文化祭、運動会のポスターはもちろん、生徒会選挙の時には立候補者全員のポスターを描きました。

——技術の進化の感動から、さらに熱中したのですね。

篠塚 高校は芸術専門高校に行きたいと思っていましたが、親からは高校までは普通の高校へ行ってくれと反対されて、結局、都立九段高校に行きました。

高校ではエアブラシというツールに出会いました。画家の長岡秀星さんが手掛けた、アース・ウインド・アンド・ファイヤーのLP盤ジャケット画に感動して、こんな絵が描き

たいと思ったのがきっかけです。その絵はエ

アブラシというツールを使っていました。エアブラシやコンプレッサーは高価でしたが、高校3年生ぐらいにやっと買えて、エアブラシでたくさんイラストを描きました。文化祭、体育祭のポスターはもちろん、他にもたくさん作りましたね。

——没頭していたのですね。当時、周囲では突出していた存在だったと思うのですが、美大にはやはり、そういったすごい人たちが集まるものですか。

篠塚 そうですね、美大志望の学生が全国から集まりますので。とても倍率が高く、ほとんど現役合格する人がいない世界です。私も一浪して、多摩美術大学に進みました。

海外に目を向けた青年時代

無いような面白い課題や授業をやっていて、非常に興味深く学びました。

——コンセプトやプレゼンテーションが大事であると。

篠塚 多摩美大の卒業の時期になり、広告代理店を目指して就職活動をしたのですが、電通も博報堂も落ちてしまいました。すると父親から「お前は実力がまだ足りないんじゃないか。もう一回勉強してきたらどうだ」といわれ、私は全く英語もできませんが、デザインをさらに学ぶためにアメリカへの留学を決めたのです。

——お父様の言葉で留学を決意された。どこに留学されたのですか。

篠塚 先ほどの教授の、アート・センター・カレッジ・オブ・デザインに入学しました。英語はどうかなるかと思っていたらどうに

——大学での学びは何でしたか。

篠塚 アメリカのアート・センター・カレッジ・オブ・デザインを出られたある教授の授業が印象的でした。当時、日本ではまだコンセプトやプレゼンテーションという言葉も無いくらいの時代に、コンセプトが大事だ、プレゼンテーションが大事だ、と言う先生でした。授業では毎回、プレゼンテーションをするのです。テーマも抽象的で「あなたの思う東京」というテーマが出されて、翌週にそのプレゼンテーションをする。その表現方法は自由で、絵を描いて持ってくる人もいれば、喋りだけで説明してもいい、何をしても良いのです。東京タワーのプラモデルを作る人、寸劇で表現したりする人もいました。そんなプレゼンテーション重視の、アイデア発想を鍛えるクラスでした。毎回、他のクラスには



もならなかったの
で、昼は英語学校
に通って、夜はア
ート・センターの
クラスを取るとい
う生活を1年以上
続けました。その

後、TOEFLの規定を満たして、アート・
センターにフルタイムで履修できました。日
本の大学とは異なり、即戦力となるための専
門学校みたいな学校でしたので、密度が濃く
て大変でしたけど、楽しかったですね。

卒業後、せっかくアメリカで学んだのだけ
ら、私は絶対アメリカで働きたいと思い、ア
メリカで就職活動をしました。これも大変で
した。1989年、アメリカは不況で、外国
人が就職することは難しかったです。電話

で断られることがほとんどでしたし、20社以
上面接してもダメでした。ただ、私はこの就
職活動の中で大切な教訓を得ました。それは
「人に尊敬の念を持つ」ということです。

——人に尊敬の念を持つ。

篠塚 何かというと、日本で就職活動をした
時と比べて、アメリカ人は皆丁寧な対応をし
てくれたのです。学生が採用面接に行く
と、必ず社長かデザイナーの責任者が対応してく
れます。丁寧な握手から始まって「今日はわざ
わざ、遠くから来てくれてありがとう」と言
う。持っていた私の作品集も丁寧に見て
「これは素晴らしいね」と言いながら様々な
アドバイスをくれました。その上で「残念だ
けど、うちにはデザイナーの空きがないから
雇えないんだ」と丁寧に対応されました。断
られても、紳士的で丁寧な対応をしてくれた

ことは嬉しかったです。その上で「知り合い
のデザイナーが独立して〇〇という会社を立
ち上げたから、行ってみたらどうかかな?」と
紹介までしてくれたのです。出会う会社は皆
そういった対応をしてくれたので、私は「レ
ベルの高い人は心が広い。自分もそうなる
う」と心に決めました。その時から、人と出
会うときには必ず尊敬の念を持って出会うこ
とを心がけました。

——就職活動のご経験から、大きな影響を受
けたのですね。

篠塚 就職難の中、やっと就職先が見つかり
ました。ロサンゼルスのお小さな中堅のパッケ
ージ事務所でした。入れたからには1年は頑
張ろうと思って取り組んだのですが、不況で
あまりにも仕事がありませんでした。半年ほ
ど経ったある日、唐突にボスに呼ばれて部屋

に入りました。いつもは開けっぱなしのドア
を「閉めろ」と言われて、何か違う雰囲気を感じ
ました。続いて「We decided let you go.
(行っちゃいよ)」と言われたのです。つまり、
仕事がないためのレイオフだったのです。な
んと言えいいのか分かりませんでした。映
画などで「You're fired. (クビだ)」と言われ
るのは知っていましたけど、まさか「行って
いいよ」と言われるんだと思って驚きました。
あまりにもあっけなくて、何にも言えずに荷
物をまとめて、帰りの車の中で呆然としまし
たね。

自ら掴んだ大きなチャンス

篠塚 わずか半年でクビになりましたが、日
本に帰ろうとは思わずに、前から行きたかつ
た「ランドーアソシエイツ」に挑戦しました。

すると、たまたまデザイナーの空きがあつて就職できました。解雇も結果的には良かったのです。

ランドーアソシエイツは、サンフランシスコに本社があり、世界中に支社がある、世界一大きなブランディング会社です。そこでシンボルマークとパッケージの担当者として採用されました。サンフランシスコ本社で2年ほど働いて、東京支社に転勤という形で日本に戻ってきました。すると、ランドーアソシエイツに長野オリンピックのシンボルマークのデザイン案件が来たのです。

——ここで人生を変える案件と出合うのですね。

篠塚 このチャンスを掴むために準備してきましたんだ、と思つて自分の全ての力を注いで、寝る間も惜しんでデザインを手掛けました。

を作っている。花びら6枚が雪の結晶の六角形を描き、花弁の色は五輪のうち黒を除いた青・黄・緑・赤と、長野県の色であるオレンジ、日本を象徴する色として紫（仏教において最も位が高い色、などの意味）の6色です。そしてグレーの影が落ちていて、立体的に見える構図になっています。

——歴史に残る仕事ができたとすることはデザイナーとして素晴らしい巡り合わせがあったのですね。

篠塚 デザイナーにとつて、オリンピックやワールドカップなどのマークは、誰しもがやりたい。けど、チャンスが巡って来ないときない。大きなプロジェクトに出合うためには、大きな会社に入らなきゃいけないし、そこで実績と実力を積まなければいけない。だからランドーアソシエイツに入ろうと決め、

社内コンペには世界中のデザイナーから1000点以上の作品が東京支社に集まり、そこで社内選考を繰り返して、最終12案がオリンピック組織委員会にプレゼンされます。12案から7案、そして4案、3案と絞られ、そのたびにプレゼンを繰り返しました。3つに絞られたところで、過去に類似したマークがないか、世界中の事例と照合する調査が2ヶ月ほど入ります。その時は3つともクリアして、最終的に組織委員会が選んだ1つに、僕の作品が選ばれたのです。

——すごい、長い道のりと多くの段階を乗り越えたのですね。どういったコンセプトで作り上げたのでしょうか。

篠塚 「花と雪の結晶」「人の輪」がコンセプトです。花びらの一つひとつが冬の競技の選手の手形になっていて、それが集まって人の輪

遠回りしてでも何とか入社できました。入社してからは絶対にチャンスが来る、来たらそのときに絶対チャンスを掴もうと思つて、常に腕を磨き続けました。長野オリンピックの案件が来た時には「ここに全てを懸けずにいつやるんだ」と思つて、命懸けでやったのは確かです。

——小学生の時から変わってないですね、命を懸けて作品を作るのは。

篠塚 そうですね。自分が好きなことへの思い入れは絶対に譲らないと決めていました。よく「運が良かったね」とか「僕にはチャンスが来ないから駄目だ」と言う人がたくさんいますが、私は、チャンスは誰にでも平等に訪れていると思います。ただ、それを掴むか掴まないかの違いだけだと思いますし、掴めるだけの準備を日頃からしているかどうかの



違いだと思えます。
デザインが好き、という想い

——独立されてからももうすぐ30年ですね。今後の仕事観はどういったイメージですか。

篠塚 長野オリンピックの案件が一段落ついた1995年に独立し、今年で28年経ちます。デザインをやりたくて独立したので、ずっと私が一人でデザインを手掛けています。

今後の一つの夢は、夏のオリンピックのエンブレムを手掛けることです。オリンピックの夏冬を制覇したデザイナーはまだいないのです。これは今でも諦めていません。そういった個人の夢もありますが、同時に、より社会に貢献できるデザインをしたいと思っています。皆さんに喜んでもらうためにデザインをする。そんなデザイナーになりたいです。

対してのメッセージをお願いします。

篠塚 「想い」を強く持つてもらいたいです。デザイナーを始め、プロフェッショナルは「これが好きだ」「絶対になりたい」という強い想いがあります。しかし最近「これだ！」と一直線に進む人生を送るような人があまりいないと感じます。ぜひ、脇目もふらず、一直線に突っ走る、何か好きなものを見つけてほしいと思います。

正直、うまくいくかどうかはやってみなきゃ分からない。まず想いを持って突っ走って、もしそれが間違っても20代30代なら十分やり直せます。デジタルが発達した

——デザインの専門学校でも教えていらっしやいますね。

篠塚 法人の設立と同時期に、ご縁があってデザインの専門学校になりました。国内最大の滋慶学園グループのうち、デザイン関連の専門学校にて、現在では2校の校長も任せていただいております。

デザイナーという仕事が好きで、デザイン業界が発展するためにデザイナーになる人を増やそうと思いい、後進の指導をしようと思ったのです。私は多摩美大とアート・センターの両方を卒業したので日本とアメリカで学んだことを伝えたいという想いで学校で教えています。その想いは変わらないので校長になった今でも授業は続けています。

——20年以上生徒たちを見てきて感じられる変化もあると思います。次世代を担う若者に

時代に、何でも分かったような気持ちになってしまうのではなく、とにかく泥臭く突っ走れば、道が開けるんじゃないかなと思います。——本日はありがとうございました。

■しのづか・まさのり■

1960年 東京生まれ。
1984年 多摩美術大学を卒業。カリフォルニアの美術大学アートセンター・カレッジ・オブ・デザインに入学。

1989年 同校を首席で卒業。
1991年 ランドーアソシエイツ社に入社。
1993年 1998長野冬季オリンピックのエンブレムをデザイン。
1995年 ブランディングデザインを専門とするデザイン会社「イデアクレント」を設立。

1995年より現在まで、東京コミュニケーションアート専門学校他、にて教鞭をとる。

